

令和6年度第1回埼玉県総合教育会議議事録

1 開会、閉会の年月日及び時刻

令和7年2月4日（火） 午後3時40分開会
午後4時38分閉会

2 会議開催の場所

埼玉県知事公館 大会議室

3 出席した会議の構成員の氏名

○大野元裕知事

○埼玉県教育委員会

日吉亨教育長、坂東由紀委員、小林あゆみ委員、櫻井雅彦委員、今井房子委員

4 構成員以外の出席した者の氏名

○知事部局の出席者

藤岡麻里統括参事、高野正規スポーツ振興課長、松丸秀之文化振興課主幹

○教育局の出席者

佐藤卓史副教育長、古垣玲教育総務部長、青木孝夫県立学校部長、

吉田勇市町村支援部長、案浦久仁子参事、

塩崎豊県立学校部副部長兼市町村支援部副部長、岡島満市町村支援部副部長、

佐藤直樹生涯学習推進課長、荻原篤大保健体育課長、越晃宏小中学校人事課長、

高田淳子義務教育指導課長、小坂達郎報道幹兼企画幹、三橋恵介参事付主幹

5 会議に付議した事項

公立中学校における部活動の地域クラブ活動への移行について

6 発言の趣旨及び発言者の氏名

開 会

○日吉教育長 ただいまから令和6年度第1回埼玉県総合教育会議を開催いたします。

埼玉県総合教育会議の運営に関する要綱第3条によりまして、議長の大野知事に議事の進行をお願いいたします。

議 事

○大野知事 まずは、教育委員の皆様におかれましては大変お忙しい中、御参集をいただき誠にありがとうございます。

これから会議を進めさせていただきたいと思いますが、この後は着座でお話をさせていただくことをご了承ください。

まず冒頭、皆様にも大変ご心配をおかけいたしておりますけれども、八潮市の道路陥没事故の件で今も巻き込まれている方がおられますこと、心からお見舞いを申し上げます。また、様々ご協力いただいている県民の皆様に、感謝申し上げたいと思います。

さて、本日の会議におきましては、公立中学校における部活動の地域クラブ活動への移行について議題といたします。

これまで学校教育の一環として行われてきた部活動は、少子化に伴う生徒数の減少などの影響により、これまでと同様の活動が困難になることが見込まれる中、子供たちが将来にわたって継続的にスポーツ、文化芸術活動に親しむ機会を確保することが課題となっております。

国は令和4年12月に、学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドラインを策定し、公立中学校において、部活動の維持が困難となる前に、生徒のスポーツ・文化芸術活動の場として、新たに、地域クラブ活動を整理する必要があるとし、令和5年度から令和7年度を改革推進期間と決めました。埼玉県ではこの国のガイドラインを踏まえ、令和6年3月に埼玉県地域クラブ活動推進計画を策定し、まずは休日における地域クラブ活動を推進するため、協議会の設置やシンポジウムの開催等をおして、県民への理解促進に取り組んでおります。

また、県内多くの市町村で実証事業を実施しており、地域の実情等に応じた地域クラブ活動が徐々に展開されてきている一方で、更なる推進に向けては、各市町村が様々な課題に直面していると聞いているところです。

地域クラブ活動を推進し、部活動の地域移行を進めるに当たっては、将来を見据え、子供たちの視点に立った施策を着実に進めることが大切です。

現在、国が今の改革推進期間終了後の改革の方向性や、方策について議論を進めており

ます。

国の動向や、県内の市町村の実態等を踏まえ、部活動を地域クラブ活動に移行するために県としてどのような取組が必要か、その方向性について御協議いただければと思います。

なお、全国知事会では、地域クラブ活動への移行という話ではなく、今後、子供たちが地域クラブ活動もできるように、地域クラブ活動の展開にしたいというふうに言っておりまして、埼玉県はここは賛成をしているところでございます。

本日の会議資料につきましては、委員の皆様にも事前にお送りをし、ご確認をさせていただいていると思いますので、資料説明は割愛をさせていただきたいと思っております。

ぜひ今日は有意義な議論をよろしくお願い申し上げます。

それではまず、協議を行いたいと思っておりますが、初めに、部活動を取り巻く状況や地域移行の進捗状況など現状を踏まえ、地域移行を推進する上での課題についてのご意見をお願いしたいと思います。

挙手でよろしいでしょうか。では小林委員からよろしくお願いいたします。

○小林委員 はい、ありがとうございます。

私は委員として4年目になるんですけど、私自身が正に子育て中の保護者ということもありまして、子供たちの学校部活動について、非常に身近な話題であるということからとても興味を持っております。

また昨年度埼玉県地域クラブ活動の推進に関する有識者会議の方に参加させていただきました。部活動改革の進捗状況などに関しては、常に私自身も気になって見させていただいています。

その中で、私自身感じている課題について2点ほどありますので申し上げます。

まず1つ目、昨年度の有識者会議の際にもお話をさせていただいたんですけども、部活動の地域移行・地域展開についてはどうしても運動部に偏りがちだなっているの思っております。

実態把握ですとか情報収集ですとか、実証事業とか事例紹介なんかいろいろ見られますが、運動部がどんどん先行している状態で、文化部については、何となく後回しなってしまうなっているのを感じているところです。

国の方針として、まず休日の部活動からということで、休日の部活動の活動状況の実態からどうしても運動部から先にとということで、そうになってしまうという現実も理解はできますが、部活動イコール運動部ということではもちろんありません。

令和5年度から始まってもう2年経ってというところで、子供たちの教育の機会均等や幅広い選択肢のためにも、ある程度運動部の方の進捗が進んできたというのであれば、文化部の地域移行とか地域展開についても積極的に取り組んでいただきたいと思いますというのが、1つ目になります。

2つ目ですが、私自身が、まさに昭和の時代に育ってきております。その経験を踏まえて、同世代の保護者たちも部活動に関して同じような価値観を持っている方々がやはり回りを見ているととても多く、今の子供たちはそういう世代に育てられています。部活動自体が子供たちのスポーツや文化活動に触れる機会を公的に保障してきたという側面がどうしてもあります。現在正に転換期であると思いますが、そういった歴史的な経緯を踏まえた上で、これからの社会、これから先の未来の子供たちにとっても、持続可能性のある施策を進める必要があると感じているところです。私からは以上です。

○大野知事 ありがとうございます。それでは、櫻井委員お願いします。

○櫻井委員 先ほど知事から御説明があった埼玉県地域クラブ活動推進計画について、今回の地域クラブ活動への展開については、少子高齢化の対応と、教師の働き方改革というのが理由の一つになっていると思いますが、この中で、地域クラブ活動が生徒と社会にもたらす期待できる効果というところまで言及されています。

私個人的には、学校単位のクラブ活動は大変意義があるものだと思っていたので、なぜ地域展開という気持ちもあったのですけれども、現状や将来の大きな構想について色々説明を受けたり資料を見たりして、改革の必要性や地域社会の影響について理解ができました。

特に地域の様々な人や、幅広い世代の人との豊かな交流は、子供たちにとって新たな価値になると考えますし、地域クラブ活動をした子供たちが卒業後もそのまま活動して、将来的に地域の指導者として活躍することも期待できるなど、地域にとって非常に良い面があるということが分かりました。

今回、資料の4ページに国の中間とりまとめというのがありました。改革の理念とか基本的な考え方というのが載っておりましたけれども、現在の学校中心の部活動の構造について、教育的意義を継承発展させつつ新たな価値を創造するというところまで言及しています。今後長い目で見て、バランスをどうやってとりながら展開していくかというのは非常に難しい問題だろうなと感じております。以上です。

○大野知事 ありがとうございます。他はいかがでございましょうか。では坂東委員お願いします。

○坂東委員 私もシンポジウムとか有識者会議のお話を聞いていて、生徒さん、それから保護者の方も、理解がまだまだ共通していないなということは感じているところです。シンポジウムなどでもご質問される方の意識も違うので、やはり共通の理解を得ることというのは非常に大事なことだと思います。

今2人の委員がおっしゃったことと重なりますが、一番大事なのは地域に行ったらそ

の地域が責任を持つという考え、つまり学校教育と地域の教育を分けるのではなくて、子供に対する教育の機会として、体験として重要なものを地域に展開していくというその視点がやはり共通のものでありたいなど。そうなることで理解が進むと思っていて、この地域にきつといいことがある、この子供たちが外に出た時にまた違う生徒さんと触れ合ったりすることが、それは今までの学校の中だけからまた違う機会が生まれるという意味で、そういった明るい未来という考え方で、みんな共通の理解を進めていくということが地域移行を推進する上で大事なんじゃないかなと思っています。以上です。

○大野知事 ありがとうございます。では、今井委員。

○今井委員 今井です。よろしくお願いいたします。私は1月17日に、ちょうど全国の教育委員になったばかりの方が参加する文部科学省主催の研究協議会にオンラインで参加をさせていただいたのですが、ちょうど学校の部活動の地域移行の分科会に入ることができました。

そのときに、やはり様々な県の教育委員の方々が、人材バンクのことについて、とても課題を感じていらっしゃいました。

人材バンクの登録者数が埼玉県は何人ですかと文部科学省の方から御質問を受けたときに、埼玉県は50から60人ですというお話をさせていただいたのですが、もっと400人ぐらい人材バンクの登録者がいる都道府県もあったんですね。

埼玉県は去年から人材バンクがスタートしたということで、現在は、県内の学校の現職、そして、退職予定者や退職者、あとは教育局の職員の方々が、人材バンクに登録をするというような資格要件を設けているのですが、ほかの都道府県さんは広く、大学生も登録をしているところがございました。

今後は、その人材バンクの登録者をどのように増やしていくか、また、そこには、地域連携コーディネーターという、今、埼玉県でも文教大学の二宮教授が、連携のコーディネーターとして活躍いただいています、そのような方々のリーダーシップをもって、この事業が進んでいくのではないかなというふうに感じております。以上でございます。

○大野知事 ありがとうございます。もし、日吉教育長から何かコメントがあれば。

○日吉教育長 まずは、本日、テーマとして中学校部活動の地域移行を取り上げていただいたことについて、感謝したいと思います。これは本当に、教育局だけではなかなかうまく解決できない課題だと思っています。

部活動については、私自身は本当に部活大好き人間というところもありまして、採用されてからも長く部活動には関わってきました。皆様ご案内かと思えますけれども、部活動は生徒にとっても、また、教員にとってもすごく意義があることだと、教育者として思っ

ています。

それはどういう意味かという、子供は教室の中で学習をするわけですが、部活動という場面において、またちょっと違う顔を見せたりすることもある。そういう中で、生徒と先生が深い共通理解、生徒理解につながるっていう場面は、私は多く経験しています。それがまた、子供の学習効果にもつながっていることもあって、すごく意義深い活動だと感じています。

ただその反面ですね、これまで教員の献身的な活動によって支えられてきている部活動の実情もあります。私も自分の専門外の種目の部活動顧問を担当したこともありますが、特にその休日においてはですね、経験のない教員にとって大きな負担となるということも認識をしているところです。

またもう1つ、私が教員の人材育成について思いますのは、今は特に教育の歴史的な大きな転換期だと思っています。例えばデジタルの活用や、主体的対話的で深い学び、探究学習部分で大きく教育が変わっていかねばいけない中で、やはり教員も学んでいかねばいけないだろう。その中で、ある程度ゆとりを持ってしっかり勉強できる時間も確保していかないとはいけないと思っています。

ちょっと長くなりましたが、そのような視点で考えますと、これからも若者からその教職という職が選ばれ続ける職業であるため、そして採用された教員がしっかりその意欲と能力を持って最大限発揮できるような職場の勤務環境を整えていくということが重要でありまして、そのためにも部活動の改革が今必要だと私としては理解しているところです。以上です。

○大野知事 ありがとうございます。まず今日は議題として、部活動の地域移行ですけれども、まずは課題について整理をして、そして将来について、皆様のご意見をいただきたいということでございました。

皆さんからお話をいただいた中でいくつか五月雨的にお話をする、まず一つ目は、文化部の地域展開、比較的遅れている文化部の展開をどうするか。それから二つ目には、教育的意義、先ほど教育長からもありましたけれども、櫻井委員からもありましたが、教育的意義がありながらも、これを発展しながら新しい価値をどう付けていくか。それから三つ目には、持続可能なものにするとともに、学校と地域を対立させるのではなくて、新たな価値を作るためにどうするか。それから四つ目には、人材バンクの登録者をどうやって増やしていくか、それから同時に、地域連携コーディネーターのリーダーシップと、この多分5つぐらいが今、課題として出てきたと理解をしております。まずそれはよろしいでしょうか。

はい。課題はそういった形で一旦整理させていただくとして、これらについてはもう五月雨式で結構でございますので、自分としては将来的に、こんなことをするべきだ、あるいはトライアルですよ、そんなのはどうか、またそういった御意見を頂ければと思います

すが、委員の皆様いかがでございましょうか。櫻井委員お願いします。

○櫻井委員 現時点では、中学校の休日の部活動の地域展開の話なので教育委員会が主体となっていますが、将来的な展望では社会教育という全体的な教育の中ですね、地域クラブの活性化とか、地域活動の担い手の育成といった効果も期待して実施するものがあります。やはり行政としては、教育部門のみならず、文化スポーツという、それ以外にかかる予算とか施設とか、広報とか様々な部門が関わってくると思いますし、他方で、地域住民だとか保護者という人達もきちっと協働して行っていくという、非常に横断的な施策が展開される必要があると思います。

資料の10ページのところに、現在、移行を開始している市町村へのアンケート、今後やろうとしている市町村のアンケートがあります。課題の1番目には連携体制の構築、また2番目ぐらいには、やはり予算の問題だとか人の問題だとか、非常に幅広い、大きな問題を挙げているところが多いと思います。

自分のつたない経験にはなりますが、こういう非常に横断的なものを推進する場合には、やはりトップがある程度理解を示した上で各部局をまとめ、周りの方に発信していく必要があると思います。

時々学校訪問などで市町村の教育委員会の方たちと会うと、教育委員会が抱え込んで、推進するのに四苦八苦しているという、一部ではそのような意見も聞かれました。そういう意味で、スポーツとか文化振興部局だとか、それ以外の予算とかを所掌する行政機関のトップである各市町村長の意向というのはとても重要になると思います。各自治体によって温度差があると思いますが、まず改革の必要性や現在の取組状況について、事あるごとに理解してもらえるように、県の方からも働き掛けてもらえるようお願いできれば思っております。以上です。

○大野知事 ありがとうございます。ちなみに今の働きかけ、市町村に対するその理解の徹底については何か、日吉教育長、現時点でやっていることはありますでしょうか。

○日吉教育長 今年度は保健体育課が直接所掌しているわけですが、担当者の方で各市町村を訪問させていただきまして、部活動改革や地域移行に関する課題について、直接、担当の方から御意見の方を伺っています。

資料にもあるかと思いますが生徒の減少状況であるとかあとは地理的な条件など市町村の状況は様々でありまして、それぞれの悩みを抱えて苦勞されていることを、私としても改めて認識しているところです。

○大野知事 なるほど。トップの理解が必要だって今ご指摘だけど、その視点では何もやってないってことでいいですね。

○日吉教育長 必ずしも、各市町村の首長の方に直接お話を伺っているわけではないと思います。

○大野知事 将来の課題として、首長に直接何か伝えられるようなトップセミナーみたいなものをアレンジするとか、まず理解をしていただいて、県がやるのはもちろんいいのですが、それが結果として、市町村まで下りていかないと意味がないので。そういったことはちょっとこれから考えませんか。

はい、ありがとうございます。他に、課題に対するご意見は。どうぞ今井委員。

○今井委員 2月1日に、ちょうど第2回の地域クラブ活動シンポジウムというのが川越で開催されました。私も参加いたしました。そこでは、各市町村が実証事例を発表されて、皆さんいろんなことを取り組まれて頑張ってもらってるということを肌で感じてまいりました。

その中で、やはりスポーツ振興部局と文化振興部局、そして教育委員会、この3つが連携をすることの大切さということが、お話の中にありました。スポーツ振興部局がスポーツを中心にやって、文化振興部局は文化をやっていくと。でも教育委員会としてはこういう取組があると。それが一つの方向に向かうことによって、ある成功した市町村では、スポーツクラブと連携をするなど様々なことを取り組んでいると。

ただまだまだこれから、例えば受益者負担であったりとか、話は出なかったんですけども、例えば中学校であれば、今まで小学校6年生だった子がいきなり中学校に上がって、学校ではないところに通って部活動をするというようなときの安全性であったり、保険であったりとか、そういうような問題もこれから出てくるのではないかなと感じています。

その中でも、とにかくやっていこうというような前向きな意見がとてもたくさん出たので、今のお話にもありましたように、こういうシンポジウムを重ねていくことによって、それを皆さんが共有をして、意識を共にしていくことが推進につながるのではないかなというふうに感じております。以上です。

○大野知事 ありがとうございます。小林委員よろしければ。

○小林委員 現在、国の方針の基で、各都道府県が実証事業を軸に色々取り組んできていますけれども、部活動改革の理念とか、あとこれからの地域クラブ活動の在り方とか、やはり一定の受益者負担がどうしても生じてしまうということについては、国においても十分な広報を行って、生徒や保護者等の関係者の理解促進を図って欲しいなというふうに強く思います。

私はどちらかというに興味関心があるのでそういう情報を追ったりするのですが、や

はりそうでない方もまだまだ多いなっていうのが私の実感としてあります。

生涯スポーツとか生涯学習の観点から言えば、部活動改革というのは義務教育期間の子供を育てている世帯だけの問題ではないはずだと思うんですね。ですけど、やはりその直接の当事者である子供たちや保護者でさえも、地域によってはやっぱりちょっとまだまだ情報に偏りがあるとか、理解が進んでない様子も見られるなど感じています。さらなる理解促進のためには、場合によっては国の方にも、しっかりと広報して欲しいと要望することが必要ではないかと私は感じています。以上です。

○大野知事 ありがとうございます。これは教育長とも私話をして、国にしっかり要望して参りましょう。

○日吉教育長 はい。

○大野知事 もしほかにあればいかがでしょうか。

○坂東委員 ちょっと視点が違うかもしれませんが、例えばシンポジウムで、小さなアクションで成功しているところを見てみると、協力してくださった企業とかNPO団体が、これは楽しかったとか、これやって自分たちの仕事にもなったんだ、という意見を出しています。つまり今までの仕事にプラスアルファしているけれども、それが自分たちの今までの活動にとって良いことになる。そういう意識が多くあると、地域展開へのつながりになると思うんです。毛呂山町さんだっただと思いますが、城西大学の学生さんが積極的に地域移行のお手伝いをしていました。

また、私個人的に子供の体験機会の格差をなくすというプロジェクトをやってらっしゃる企業の方と話したことがあります。土日に継続して活動をすると、そのことが楽しくて、私たちの活動になって良かったなという意識を持ってらっしゃる企業さんはいっぱいいいると思うんですね。

今後の広報において、そういった成功体験って言い方が良いかどうか分かりませんが、これからの社会のために、子供たちのためになっているんだっていうことを広く理解できたという意見を伝えることは非常に大事です。その意見の一つとして、コーチングのスキルを逆に習ったことで、自分の教え方が本当に良かったんだろうかみたいなことが、かえって勉強になったとの声もありました。

こういうことが地域移行を広げていくために非常に重要な視点だと思っています。仕事が増えるというよりはむしろそれをやることで今までの自分たちの地域活動に、例えば全然大人しかいなかったのに子供が入ることで良くなるということもあると思います。どうしても財政のこともありますので、既存の施設を活用したり、今公民館の制度がいろいろあると思うんですけど、そういった今ある施設をまた活用することで、財政も負担に

ならないでできたのではないかということも、シンポジウムを聞いて思いました。

私の仕事は医療になりますが、例えば、今小児科医も子供に病気のこととか、心構えを教えたいよねっていう意識のある人も増えてきているんですね。ですからやっぱり子供に関わる仕事をしてらっしゃる方の中に、それがどういう形で続けられるか分かりませんが、それが子供の将来になるっていうことを自分の仕事の糧にするっていう気持ちのある若手が増えている。そういうこともちょっとずれたりしているかもしれませんが、こういった展開に当たって、そういった仲間を増やすという視点につながるのかなというふうに個人的に思います。

ですので、共通の理解とか価値を作るときに、この埼玉県の子供たちがこんな地域でこういうふうになっていくっていうイメージも持ちながら、地域の方に協力してもらって、それが良いアクションだったときに是非早めに先行してですね、いろいろと広報してもらって、この地域でこんなことあるよっていうことをお伝えするっていうのもやり方としてはあると思っています。以上です。

○大野知事 ありがとうございます。ちょっと確認させてください。今のお話で、NPOや企業の方々の活動にプラスになる、その良い例を横展開するのは、対象は首長でしょうか、それともNPOや企業でしょうか。

○坂東委員 私は様々な企業がいいのではと思います。今まで活動していた大人だけのものに、ちょっと中学生が入ることでもいいことなんです。大変なことかもしれませんが、やって良かったと思ってらっしゃる方がいると聞いていましたので、地域の企業とか運営団体さんにお話するときに、そういったことを伝えることも必要だと思います。

○大野知事 ありがとうございます。なかなか難しい気はしますけれども、実はこれ埼玉県で子供食堂、子供の居場所を作るときに、我々ネットワークを作っていて、ちょっと似ているのは、以前は県が子供の居場所を作ってたんですが、去年の12月から地域移行となりまして、市町村が主体になることになりました。

こういった中で、当然市町村ごとにでこぼこが必ず生じるわけですが、ネットワークを作ってそういったノウハウを作るということは試行していて、埼玉県の場合はおかげさまでもともとネットワーク、日本一だったってこともあったんですけど、これが少しずつ機能している。

ただ、今の段階で多分、地域のクラブ活動の地域化について、ネットワークができていくわけじゃないと思います。そういった前例もある、委員御指摘のNPOや事業者の方々や新規の参入者の方に、こういった良いことがあるんだ、あるいはこういった成功事例があるんだってお伝えできると思うので、そこは教育局と知事部局とも少し連携を密にしてこういった手法もあります。

○坂東委員 そうですね。シンポジウムにいらっしゃる方は実際行政の方達が多くてNPOや企業の方の参加が多いわけではないけれども、協力していただける方々はたくさんいらっしゃるような気がします。

○大野知事 ありがとうございます。何かありますか。

○日吉教育長 私も坂東委員と同じような意見を持っておりまして、私が住んでいる地域の例えばスーパーマーケットに行くと、少年団募集といったポスターが沢山貼ってあるんです。ただそのポスターを見ると、募集しているのは小学生までと書いてあるポスターがほとんどでありまして、中学生まではなぜ募集しないのかなと思うことがあります。また、文化系でも地域によっては様々な楽器を習うようなところもあるし、歌だとか、色々なサークル等があると思うのですが、なかなか教育と地域の活動が、同じプラットフォーム、ステージに乗る場面が少なく、いかにそこをネットワーク化していくかが課題だと思っています。

この地域移行の話を教育長になって伺ったときに、県としては、人口の偏り等はありますけれども、どこの地域でもできるようなモデルを作ることが大事であると、率直に感じました。

今年度から、秩父地域でも広域で連携をしていただいて、今取り組んでいるところです。今後子供が少ない地域においてどうしていったらいいのか、モデルをしっかり研究していきたいと思います。

○大野知事 もう1点、ちょっと視点を変えて委員の皆さんにお伺いしたいと思います。

先ほどの話の中で持続可能性だとか未来、地域における新たな価値の創造って話がありましたけど、その前提として、教育的意義を継承させる、そしてそれを地域移行、展開が必要になる。先ほど教育長からもありましたけれども、今の学校部活動のところから、まずは週末ですけれども、新たな価値を作っていく、あるいは地域を巻き込んでいく、このプロセスも多分課題として取り上げるべきだと思うのですが、その辺については御意見があればいかがでございましょうか。櫻井委員。

○櫻井委員 様々な取組が今試行で行われていますが、私思うに、各種大会とか競技会の運営に関しては、あまり今の時代勝利至上主義は良くないとも言われていますが、やっぱり大切なことだと思うんですね。一つの目標に向かって頑張るという、これを将来的には地域として大会に出るといようなことも考えて、学校単位、地域単位の参加について整理して、地域の一体感のようなものを少しずつ醸成していくというような、地域移行の仕方もあるのではと考えていました。以上です。

○大野知事 質問ですが、人数が足りないから、複数の学校が一つのチームを作るのではなくて、もう地域として違う単位で参加するイメージですか。

○櫻井委員 私としてはですね学校単位でできれば学校単位もありますけれども、その移行の中では、例えば、地域として盛り上がるためには、そういう大会も将来的には考えたらいいのかなと思っています。

○大野知事 ありがとうございます。その他ございますか。

○今井委員 はい。シンポジウムでも最後に、コーディネーターの方が、今まで学校の教員がやってきたことを、いきなり地域に教育を求めると、それを担う人たちが大変なのではないかというお話で締めくくられていました。先ほど教育長から少年団のチラシの話もありましたが、少年団が小学校までではなくて中学生もみたらいいのではないかというお話はシンポジウムでも出ました。

私はミニバスケットボールで10年間、子供たちを指導した経験があります。小学生は教えられたのですが、中学生まで教えられるだろうかというところに、すごく壁を感じました。保護者からの期待であったり、選手の選定であったりで悩むようなところもたくさんありましたので、勝負、勝敗を考えずに少年団で楽しくやりましょうというような部活動であれば成り立つのかもしれませんが、保護者のニーズや子供たちの成長ということを考えると、少年団との結びつきも一つの案ではあるのですけれども、私は体験者としては難しいなというような印象を受けました。

もう1点は、秩父高校で取り組んでいた探究活動のお手伝いをさせていただいたことがあるのですが、その後、その担当の先生は探究部が設立されるというタイミングの飯能高校に異動されました。探究の時間というのがなかなか学校の中で浸透しない中、部活動として探究の指導をされて、ちょうど私は大宮公園の官民連携プラットフォームに入らせていただいたので、大宮公園の池守体験をしていただいたんですね。その時に、高校生だけじゃなくて、もっともっと地元の人が、こういうところに参加をしてくれたら広がるのにな、というような感覚を得ました。私の感覚で恐縮ですけども、地域と様々なところから連携を図る、そして、それを情報発信していかないと、なかなか広がりが見られないと思います。インターネットに情報をアップするとか、あるいは探究部の子供たちは毎日ブログを書いています。

そういう探究活動やオンラインを使った活動、様々な手法が文化部というような形になるのかもしれませんが。市町村の話では、新しい部活動としてプログラミングをスタートしました、マインクラフトを使ってまちづくりをしていますというようなお話もあったので、もっともっと新しい部活動、今ならではの文化部、これから未来をつくっていく子

供たちが、こういう部活動があったらいいなっていうのをもっともっと取り入れて作っていけたら、楽しいんじゃないかなと思いました。以上です。

○大野知事 ありがとうございます。小学生、中学生、高校生が入ったらいいっていう話もありますけれども、それはやっぱりベースがあるからですか。入りやすいついていうのはあるのでしょうか。

○今井委員 秩父高校の先生は高校生だけを見ているのですが、様々な活動をされている中で、また、様々な市町村の方との連携を図る中で、難しさはあるのかもしれないですが、例えば、中学生が秩父高校に行って高校を見ることで秩父高校へ行くきっかけになったり、高校生が中学校に行って何かをしたり、学校の箱じゃないところに行ったり、それをオンラインでのネットワークを作っていく、誰もが参加ができるような仕組みを、ITを活用して作ることは可能なのではないかと感じます。

○大野知事 個人的な話になりますが、私はボーイスカウトの埼玉県の連盟長でもあります。ボーイスカウトってOBの方で60歳を超えた人もいれば、高校生もいれば小学生もいて、ある意味つながっている良いパターンなんですけど、その代わりカチツとしていて、何とかの誓いから始まってですね、60年前から同じことやっているんです。これは一つのパターンで、これはこれでありだと思います。

一方、私N高を1回訪問した時に、N高って実は子供たちが欲しいクラブしか作らなくて、もともとの、例えば野球部とかあってもその年に希望がなければ潰しちゃうんです。その代わり好きなものは全部自分たちで作る。何部でもいいです、オンラインでやります。

どっちも多分すごく極端だけど、どっちもありだと思うんですよ。だからその成功体験をどう伝えるかということがすごく大切で、ボーイスカウトも必要だと思うし、N高的な好きなやつだけ集まって、その代わり、場所は学校が提供してあげる。今回は学校じゃないですが、そういった両方かなあという気がします。皆さんからいかがでしょうか。

○小林委員 私も個人的な話を中心になってしまいますが、私は昔からスポーツをずっと、中高大社会人ママさんとずっとやってきています。それぞれの自分のライフステージに応じて、スポーツを継続しています。子供たちも中高大と進んできている中で、それぞれのスポーツの部活動をするのですが、どうしてもそれだけじゃ足りないとなったときに、地域の社会人チームとか、ママさんとかに連れて行って、一緒にプレーするという経験をしてきましたし、させてきました。

それって当事者としたら全然ウェルカムなのに、ママさんバレーのチームに中学生でちょっと練習したいというときに、関係者だったらすごく入っていきやすいけれども、知らなかったら全く入ってこられない。でも、多分ウェルカムって思っている地域の学校を

使っているスポーツ団体、文化団体って結構あるんじゃないかなと思っていて、その辺の情報に、まだたどり着けていないのではないかなとは思っています。

公民館とかコミュニティセンターなどの公共施設で活動している文化団体、スポーツ団体、あと学校の平日の夜と、週末の夜とかに借りている社会人、そういう人たちがたくさんいると思うんですけども、その人たちとのつながりを作ることで何か変化があるのではというのを感じていますし、それを地域の大人たちと、その学校に通っている子供たちのつながりの場、新たなネットワークの創造につながるんじゃないかなというふうに思っています。

やっぱりどうしても教育となってしまうとその受け入れる側も、ちゃんとしなければとか、それこそ教師の資格を持ってなきゃいけないのかと考えて、どうしてもその責任感とともに重みとかそういったものも感じると思うのですが、もうちょっと、子供たちの生き生きと過ごせる地域の場所をどうやって作っていくかみたいところで、枠を外して考えるといいんじゃないかなと感じています。以上です。

○大野知事 先ほどすみません。今井委員の方から、資格要件は県にはあって、そこには学校の先生やOB、あるいは教育局の職員、こういった人たちが、その資格要件に受かって登録している、ちょっとカチツとしたもののイメージがものすごくあります。そうではなくて、多分、資格とか関係なしで、子供たちが生き生きできる、そういう枠組みにすると変化があるだろうという話だったと思います。これ、どうなんですか。資格がないと駄目ですか。それともカチツとしたものしかできなかった。

○日吉教育長 カチツとしたものが好きって教育の特殊性もあるかもしれません。やはり学校側としてはですね、中学生を地域クラブ活動の団体の方に紹介する以上は、その安心安全みたいなものの担保がしっかりされている方が紹介しやすいと思います。

そういう意味では、その指導者がどのような方であるのかっていうところは、やはり生徒とか保護者の理解が得やすいってところから、まずはそこからやっっていくという考えで人材バンクを作ったというところですよ。

○大野知事 なるほど。先ほど、地域移行が地域展開にという話でしたが、今やっている学校の部活動をそのまま移行してという発想は確かにある。これはこれで、先生はよく子供たちがかわいいからこそよく分かるし、他方で、先ほど小林委員がおっしゃられたように、何らかの化学変化を起こすように、地域のところに連れて行って生き生きとさせるためには、多分今までの枠組みとは全然違うものも必要なのではないかな、それが逆に地域展開になるのではないかなという気はします。その辺は、教育委員の皆様におありになるので、多分、両方良いことも悪いこともあるかもしれませんが。

○坂東委員 今のお答えになるかどうか分かりませんが、でも、やっぱり子供は共生社会の中で大きくなっていくものだと思うんですね。もし地域展開するのであれば、やっぱりがっちりした枠組み、安心できるようにしてあげるけれども、逆にまた違う体験として、一つの枠組みだけで生きるのは生きづらい子供たちが、学校とは違う大人や違う学校の子供たちと接することで、また良くなる部分もあると思うんですね。

だから、今までとは違う枠組みで考えてあげる方が、これからの社会ではなるべくたくさんの人で子供を育てていくっていう感覚にした方が、この地域展開のイメージを作りやすい気がしています。

それと、今後展開する中で子供の意見を取り入れた方が良いというのはちょっと言おうかと思ったのですが、子供の意見の中で難しいのは、例えば先ほど櫻井委員がおっしゃった、やっぱり学校で頑張って一番になるんだっていう声。今度それができなくなった学校の子供たちは、駅伝の連合チームみたいなことでまた一番になれるように、中体連の方達にお願いしてそういったチームを作ったり、他の学校の子供達とも組んでそこでそのチームが頑張って上がっていきけるような、いわゆる競争の中の仕組みを変えたりすれば。

あと、この前音楽関係のNPOの方たちのお話を聞いたのですが、ちょっとお歳が違う方々が子供達と一緒にあって、そこで学校で習っていた木管のやり方とちょっと違うことを教えるっていう時に、今までは社会教育としてそういった活動をしていたけど、13歳の子供が来たときに、学校とは違う教え方をしたらどうなるんだろうと考えられていました。コーチングについての議論で、やっぱり13歳の子供にはこんなふうに教えると、でもそれは大人への教え方にも共通するんだな、みたいなことおっしゃっていたんですね。地域展開という流れ、そういった社会が醸成していく過程の中で非常に大事なポイントになってくる気がします。

まだまだ時間も掛かるでしょうけれども、子供たちっていうのは近いんだっていう意識の中で、あまり堅苦しくなく、でも安全な教育を地域に展開できるっていうのは、ちょっと理想論的ではありますがいいのかなと思っています。

○大野知事 そろそろ時間も押し迫ってきましたので、あとお一人、お二人ぐらいですが、ここはちょっと言っておきたいなということがあれば、是非お願いします。

よろしいですか。ありがとうございます。

今ちょうどいくつかの市町村でトライアルをしている時期だと思うので、そういったトライアルをしているもの、さっき横展開って話がありましたけれど、多分両方、先ほどの議論の中ではあると思うので、そういったものをまた教育委員の先生方にも、フィードバックしていただいて、良い悪いとは、多分一概には言えないでしょうし、どっちの良い面も悪い面もあるでしょうから、その辺是非、教育局から教育委員へフィードバックをしてもらって、またその次の1歩につなげるというのはいかがでございましょうか。よろしいですか。

様々多面なところから御意見を頂いたので、私のまとめ方が散漫になってしまって大変申し訳ないと思いますけれども、でも、色々議論ができたのではないかというふうに思っています。ありがとうございます。

いずれにいたしましても、今日の会議で様々な意見を頂きましたが、共通しているのは、部活動の地域クラブ活動への移行の推進のために、将来にわたって子供たちにどう良い方向に、つまりその学校が忙しいから地域に預けるんだといった議論よりも、今日は多分、前向きな議論がすごく多かった。これを充実して、持続的なものにするんだってこういう前提で、全員の方に御議論いただいたように思っています。そこはとても子供たちだけではなくて、地域にとってもいいアプローチになるんだらうというふうに思いますので、大変有意義な議論を頂き本当にありがとうございました。

改めて委員の方々の御議論を頂いて、中長期的な視点を持って、部活動への地域クラブ活動への移行、展開を推進したいと思います。本日は熱心に御議論いただき本当にありがとうございました。

それではチェアを教育長にお渡ししたいと思います。

○日吉教育長 知事ありがとうございました。

教育委員会では本日の議論を踏まえまして、子供たちにとって豊かで幅広い活動機会を保障するため、今後とも、知事部局の方とも連携しながら、課題に対応して参りたいと思います。

それでは、以上をもちまして、令和6年度第1回、埼玉県総合教育会議を閉じさせていただきます。ありがとうございました。

閉 会